

現代における非行とは

前回のお盆特別号で記載した「現代における非行とは？」という言葉が気になって調べてみました。いろいろと情報がある中で、興味深いものがありましたので掲載します。

「最近の非行の特徴と少年の心」

大阪家庭裁判所 橋本和明

少年非行の動向を見ると、現代の非行は戦後第4のピークを迎えている。そして、マスコミや新聞紙上を騒がすような重大少年事件が後を絶たない。社会は「非行の凶悪化」と称して、最近の非行の深刻化を問題にしている。あるいは「非行の低年齢化」を指摘し、現行の少年法では受分に対処できないのではないかと、法改正を求める動きにもなっている。

最近の非行の特徴

(1) 非行動機に分かりにくさ

概して、少年の語る動機がすぐに理解できなかつたり、話を聴いてもなるほどと納得できなかつたりする。決して嘘を言っている訳ではないが、彼らの話に耳を傾けていると「この動機は目の前にいるこの子の口から発せられたものであろうか」、「この少年の心の中にそのような動機が犯行時に果たしてどこまであったのだろうか」と疑いたくなる。もっと言うならば、捕まってから考え出した『後付けの動機』とでもいうような面が見られる。

また、少年が口にする動機が薄っぺらく軽いものであるため「そんな動機でこんな事件まで起こすのか」と不可解に思うことさえあり、行為の重さと動機の希薄さが釣り合わない。

(2) 精神的な未熟さが顕著であること

以前なら盗むに際して、店員の隙を窺い、コッソリとポケットや衣服に商品を隠していた。しかし、最近は店員の動きや防犯カメラなどお構いなしに商品を盗む。ひどい場合は“カゴダッシュ”といって、買い物かごに欲しい商品をいっぱい詰め込み、出口から強引に走って盗る手口も蔓延し始めている。そして、店員から呼び止められても応じず、制止を振り切って強引に逃げるケースがある。このような少年に共通するのは「モノは見えていても、人は見えていない」ということである。

だからこそ、盗みが発覚した時も、被害者に謝ろうという考えがまったく思い浮かばず、自分勝手に強引な対応をしてしまいやすい。少しでも人が見えていれば「もしかすると誤れば許してくれるのではないか」との淡い期待を抱き、謝罪の言葉を口にできたかもしれない。現代の子どもはそれさえもしないケースが増えている。対人関係が希薄で、“人”よりも“モノ”を重視し、抑制のきかない衝動性が彼らの中に渦巻いている。まさに精神的な未熟さと言えよう。

(3) 漠然とした不安感が背景にある

三つ目の特徴として、漠然とした不安感が背景にあることが挙げられる。

思春期にいる者は進路や性など様々な悩みを抱えている。時には「自分は何者だろうか」といった自我同一性の問題で悩む者もいる。ところが最近の少年は、そのような具体的な悩みではなく、もっと漠然とした不安感を抱えていることが多い。例えば「いじめられたり、仲間はずれにされるのではないか」といったことを考えている子どもは意外に大勢いる。実際にいじめられた経験がなくても、彼らはそのような大きな不安を抱えやすい。別の言い方をすると、いつ自分がいじめられても、逆に言えばいじめられてもおかしくない。被害と加害の境目が曖昧な感覚を持っている。インターネットでの自殺サイトにアクセスしたり、リストカットやクスリを飲むなどの自傷行為をするものも後を絶たないが、彼らも漠然とした大きな不安感を背景に持ち、生と

死への境界線の曖昧な感覚があると指摘できる。

「キレル少年」の特徴

i 「恨み」とは違う暴力のメカニズムがある

暴力事件を犯しても、相手に対する恨み辛みの根深い感情はなく、突然に衝動的となって暴力をふるってしまう。そして、我に返ると何事もなかったように相手と平気で話をしたりする。

ii 対象との分離に情緒が伴わない

例えば、恋人との別れの場面で、恋人との深い情緒的な結びつきがあるために、別れに際して「切ない」とか「やりきれない」とう思いがのこる。この感情は対象とのつながりがあればこそ沸き起こるものであり、「キレル」少年の場合は、その対象を持っていない。

iii 対象を喪失する不安が強い

確固たる対象が持てないばかりに、目の前にその対象がいなくなると、心の中の対象が薄れたり消えていく不安が極めて強くなる。

「キレル」少年は、言わば乳児のような対象関係にも似ている。目の前に養育者がいると安心できるが、そうでないと不安になって泣いたり時にはパニックに陥ってしまう。そして、養育者が現れると機嫌を直す。「キレル」少年はある意味では、この段階にとどまっていると考えられる。

発達の視点から見た教育や処遇

最近の少年に対しては、何よりも大切な視点は発達の観点から非行を捉え直し、処遇を考えていかなければならない。

これまで少年院などでは矯正教育が施されてきたが、「矯正」という言葉が示すように、性格や行動傾向などの誤りを直して正しくすることがその主体であった。しかし、あまりにも精神的に未熟で、発達途上にある少年に対しては“矯正”というよりも“育成”という面を重視していかなければならない。まだ何も無いところから育てていくという視点がこれからの教育に求められる。

少し堅苦しい内容になりましたが、少年院の教育も「矯正」から「育成」という方向へシフトして行く時期なのだと分かりました。

浅口市**育成センター**は、平成25年に設置されました。その沿革史を見てみると、昭和30年4月に笠岡市**青少年補導センター**が設置されてから、当センターが設置されるまでは、ずっと「**補導**」という言葉が使われています。詳しい事情は分かりませんが、その時から「**育成**」という言葉に変更されています。これは上記の考えと共通するものがあつたのだと想像はできます。

また、他市の育成センターの方が退職される時に「やっぱり補導センターの域を抜けられなかったのが残念です。」と言われて、ドキッとしたのを思い出しました。これからも「育成」とはどうあるべきかを、みんなで考えていかななくてはならないと再確認しました。

防犯功労者表彰 ～藤澤福夫さん～

10月13日（木）に玉島警察署で「地域安全パトロール出発式」が開催され、防犯功労者のみなさんが表彰されました。浅口市からは寄島町の藤澤福夫さんが、寄島三ツ山自主パトロール隊の代表として受賞されました。藤澤さんは当センターの運営委員や指導員として、長年貢献していただいております。青少年育成協議会の支部長もされています。

各方面でのご活躍を見ると、当然の結果とも言えるのではないのでしょうか。

“受賞おめでとうございます！”